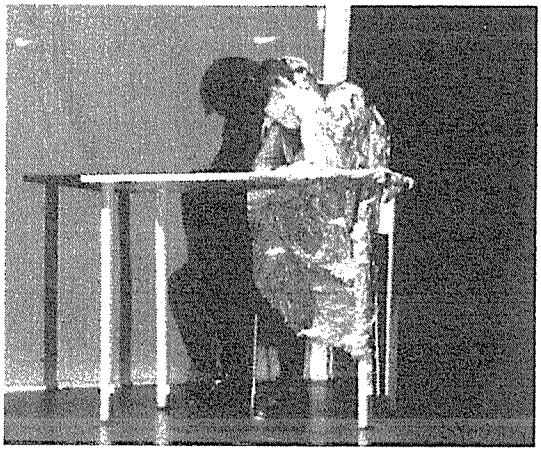
ジェンダーフリースペース通信 3号
GENDER FREE PRESS

〒195-8585
東京都町田市金井町2160
和光大学G112(G棟1階)
044-989-7777 内4112
www.wako.ac.jp/gender/

パフォーマンスアート 恐れはどこにある 開催

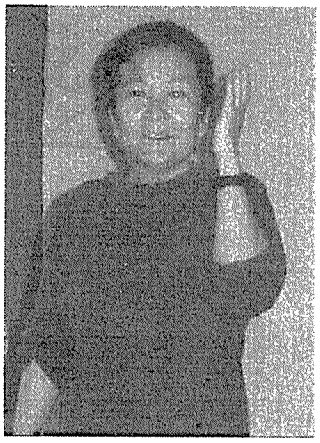
秋のパフォーマンスイベントとしてフェミニストパフォーマーのイトー・ターリさんをお迎えして、一〇月十五日にセクシュアリティをめぐる作品『恐れはどこにある』を行ってもらいました。その時、その場を即興の精神で切り開き、あくまで観客との相互作用によって成立するパフォーマンスアートの面白さを、楽しんでもらえたでしょうか。



真っ赤な中でのパフォーマンス(上)

J104教室で行われた台詞のほとんどないパフォーマンスというものを初めて見た人も多かったと思います。今回の上演は照明、映像、音響などすべてのスタッフは学生によるものでした。参加した感想を寄せてもらったので、右に紹介します。

公演後のお茶を飲みながらのおしゃべりでは、パフォーマーとして、又本学卒業生の先輩としての興味深いお話で盛り上がりました。



上演前のイトー・ターリさん(中)

始まりは観客に仮面を渡し、一緒に記念撮影をする(下)

【工藤】参加した理由は、パフォーマンス自体に興味があったからです。自分自身が考えている事を表現するのは難しいから、いい刺激になると思ったからです。

リハーサルではおおまかな流れしか伝えられない事の緊張感と、ターリさんの「やってみなきゃ何が起こるかわからない、なんとかなる、なんとかする」という言葉がとても印象的でした。実際本番では教室の電気がついてしまったり、地震がきたりとハプニングがあったけれど ステキな空間でした。始まってみて初めて出てくるその時の気持ちで動くターリさんの本番の「行為」には本当に常に自分と向き合っているのだなと感じました。流れは知っていたけれど、新鮮さや 伝わりの度合いは見にきた皆と同じだと思います。

【篠】下準備はともかく本番は非常に緊張してしまい、終わってすぐは「何とかなって良かった。」というのが正直な感想でした。

感想は言葉にしにくいですが、苦しい、とかそれに似た思いでした。静けさの中での緊張感や表情で単純にそう思ったのかもしれないのですが…。「自分の内面を表現することの意味とは一体何なのか?」と言うことは、アートの場に限らず、多くの人が考えることだと思います。そういった問掛けを感じ、自分自身に置き換えてみたときに不安感や苦しさを感じたのかもしれません。

短い時間でしたがスタッフの側としても、また観客としても、それぞれ全く違った感覚で良い経験をさせていただいたと思っています。

『性は限りなく実体のふりをした可変概念である』

蔦森（つたもり） 樹（たつき）

性はいくつあると思いますか？

十一月十一日開催の講演会は、冒頭にこの質問で始まりました。共通教養「女と男の表現空間」の前期エッセンスをまとめたもので、タイトルは『性の常識をリセットする』。性は「実体ではなく概念」だということを、具体的事象を挙げて検証していただきました。

《検証一　身体・性器について》

胎児の外性器成長過程図を見ると、3ヶ月頃まで全員同じ形で性は一つしかありません。性を作る大本が性腺で、男の性腺・女の性腺という性別がないからです。3ヶ月から先は変異の指令がかかり個別的に成長してゆきます。外性器・内性器（臓器）共に2つの種類があるというのは概念で、発生学的には同一原型の発達程度の個体差となります。程度差に男女2つのラベルをつけ、2つの典型例をあげて男と女があるという風に実体化されます。

《検証二　染色体について》

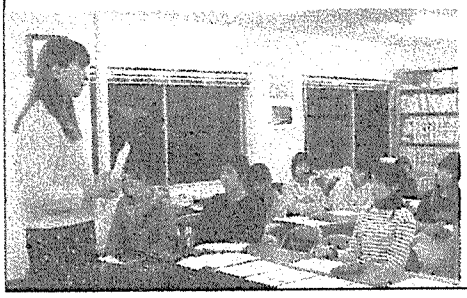
三百年ほど前に顕微鏡が発明され染色体が見えるようになりました。セットを見つけて並べて、種類の対の合わなかったものを性に関する部分、性染色体だろうと仮定したのです。性染色体がXYの違いが男と女の違いだという風になったのは実は酵素があるなしが問題で、性染色体の形自体がオスメスの決定のものではない、ということが分かりました。さらにX染色体Y染色体が実はまったく同じものだったということが最近解析されました。

《検証三　遺伝子について》

二〇〇一年には国際ヒトゲノム計画の人間のDNA解析結果が『遺伝子が個人の特徴や性格を決定するとの見方は間違い』と発表されました。遺伝子個人情報が人類の九十九，九％全員同一。性も人種も民族もラベルであり実体のふりをした概念だとわかりました。地球の全員が兄弟姉妹という理解を超えて、同胞と考えられる所以が科学的に示されました。

《検証四　システムについて》

母子健康手帳では誕生した瞬間の赤ちゃんを記録する欄には身長体重などと共に性別欄があり、そこには女・男・不明という三種類が表記されています。男女二種類では実際に即さないからです。しかし誕生2週間後までに戸籍に氏名と共に登記される段階では、男女二種類しか性の数がない。不明な赤ちゃんも男女どちらかにされます。このことから見ても、男女というのは実体のふりをした概念（ラベル）であると考えられます。構築主義から見ると、本来性があるのだ、とする本質主義が言う「男女」とはラベルであり実体ではないことが理解されるでしょう。詳しくは拝著「男を脱ぐ！」（全日出版）でご覧ください。



『エイズと共に生きた二人』

ジェンダーフリースペースの世話人井上輝子教授、また当日のの話し手であるR・リケット教授ともに欠席の中で行われた、という点がこの上映会の大きな特徴だったといえよう。お二人は当日参加できないことの言い訳に「こういうことは本来学生が主体的に行うほうが望ましい。教員の存在という権威は『うっとうしい』ので、是非勝手にやって欲しい」とはいうものの、なんだか自分たちが休むために教員の立場を振りかざしている、ようにも思える。

教員って：ずるいぞ！

しかし、結果はそんなことはどうでもよくなった。なんと大盛況。

通常のイベントの二倍以上の集客、上映中の張り詰めた自発的な緊張感。上映後のディスカッションでも「うっとうしい」教員がいないせいか伸び伸びとしたトーク。なにか「おりこうな」ことを言って評価を媚びるのではなく、素朴な疑問を出し合い、参加者が意見を戦わせる光景が見られた。

率直に「やっぱり同性愛のことはよくわからない」と言う人がいれば「同性愛者も異性愛者も変わらないよ」「いや差別されてきた経験とかがあるんだから、簡単には違いはないとは言えないのではないか」等々の意見が出る。教員のいる普段の授業ではあまり聞けないような声を拾えたことは大きな収穫である。

だからといって指導教員が居ないほうがよいということではないだろう。

「うっとうしさ」のないジェンダーフリースペースこそ私たちの目指すフリースペースなのではないだろうか。つまり教員にそのような懸念を覚えさせないような空間こそ真のフリースペースであろう。

十月二日メディア＆トークの感想として

田中太一（和光大学大学院）

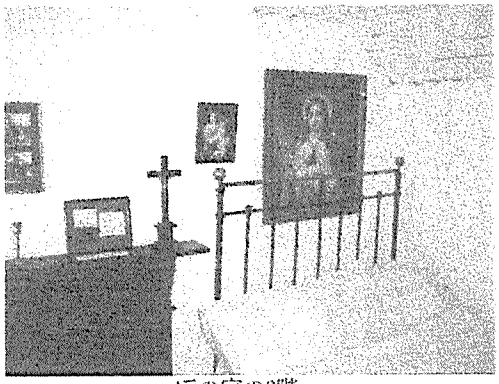
海外情報

ノラの家

吉川　信

「ノラ」という名ですぐにイプセンの『人形の家』（一八七九）が思い出される方なら嬉しい。言い古されてはいようが「女性の自我の目覚め」を扱ったショッキングな近代劇ということになり、この欄の話題としてはいかにも相応しく思われる。

けれども残念ながら今回紹介するのはそのノラではない。アイルランド西岸の都市ゴールウェイにある、ノラ・バーナクルの（生家ではないようだが、幼い頃暮らした）家である。一九〇四年にジョイスと駆け落ちしたこの女性は、ヨーロッパを転々と移り住む不甲斐ない夫に生涯付き添い、夫の創作の源泉ともなった。Barnacleという名を聞いたジョイスの父は、ならば死ぬまで離れまい、と面白がったらしい（barnacleとは、あの海辺の岩にしっかりとくっついている「フジツボ」である）。親父もノウテンキな男だった。



ノラの家の2階

アイルランド西部のコノート（コナハト）地方は、いまだにゲールタハト（ゲール語が母語である地域）が多く残り、もっともアイルランドらしい地域と言える。だから、祖国を捨てたジョイスにとっては、この地方出身の田舎娘ノラこそ祖国の表象だった。『ユリシーズ』のモリーにせよ『エグザイルズ』のバーサにせよ、はたまた『フィネガンズ・ウェイク』のALPにせよ、ノラという「原型」なしには考えられない。とくに短篇「死者たち」のグレタは出身地まで同じ。妻に聞かされた思い出話から着想を得たのではないか、とまで思えてくる。

一年ほど前になるだろうか。日本の場合青山の小さな映画館だけで公開された『ノラ』は、パット・マーフィーというアイルランドの女性監督（PatはPatriciaであろう）による作品で、アイルランド本国では少々話題になった。若手人気俳優（ユアン・マクレガー）をジョイス役に据えたものの、主人公はあくまでノラ（スーザン・リンチ）。実に奔放な現代女性として描かれていた。いささか誇張しすぎの感は否めなかったが、「アイルランドの女性監督」がよくぞここまでやった！という評価だったのだろう。イタリアでは賞も獲得している。さしたる教育のない素朴な田舎娘、というそれまでのイメージを破壊してみせた映画とも言える。

そんなノラ・バーナクルのゴールウェイの家が、数年前からちょっとした資料館として一般に公開されている。小さな二階家だが、一階の居間にジョイス関連の書籍・資料が並び、二階にノラが使っていたらしい寝室がある。こぢんまりとしていて、管理人の初老の女性も大変親切だった。「聖母マリア」的な女性を理想とする保守的な風土に生まれ落ちたノラが、大胆にも国を捨て大陸を転々とする。何も考えてなかったんじゃないか、とは言うまい。それならジョイスだって同じこと。なーんにも考えてなかったように見えてしまうのだから。やがて著名な作家となった夫の職業についてはしかし、ノラが鼻にかけるようなことはまるでなかった（あるいは単に興味がなかっただけか？）。一度だけ、入った靴屋で店員の対応が悪かったため、「あたしの夫は作家なんだから、あんたのこと書かせるわよ！」と脅したそうな。よっぽど腹の立つ店員だったに違いない。

若きジョイスが最大級の敬意を払ったイプセンだったが、後者が生み出した人物以上に、ノラ・バーナクル・ジョイスは謎を秘めている。（ちなみに、Brenda Maddoxによる大部なノラ伝は、集英社文庫から抄訳が出版されている。『ノーラ――ジェイムズ・ジョイスの妻となった女』丹治愛訳。）

きっかわ　しん（世話人・本年度学外研究中）

『暴力を選ばない男になろう
～ホワイトリボン・キャンペーンについて』

カナダで始まったホワイトリボン・キャンペーンの創始者であるマイケル・カウフマンさんが、一一月二六日和光大学に来校しました。共通教養『女と男』での講演後、ジェンダーフリースペースに場所を移しての懇談会では、講演や活動についての質疑応答が行われました。

Q. ジェンダー問題に取り組むきっかけは？

A. 六〇年代終わり頃女性運動が始まり、それを私はよく分かったし同感したんですが、自分の男性としての生き方を問い直すことはしませんでした。ジェンダーというのは女性の問題だと思っていたんです。自分は男らしさの理想とかそういうのに沿って育てられたという風にまったく感じていなかったから、男らしさに従って育てられた他の男性と僕とは全然違うと思っていました。ところが他の男性の話を聞くと、自分の考えていることと同じだったのです。その時初めて自分が直面していたことは他の男性と同じ事なんだと気がついたんです。そこで、私は男性をサポートするグループを始め（男性が自分の人生を振り返ったり、その感情について話したりする）その問題についての研究や本を書くことを始めました。もっとみんなに色んなことを教えたりすることや、ジェンダー問題についての相談を受けるような仕事をやりたくて、ホワイトリボン・キャンペーンを始めたんです。

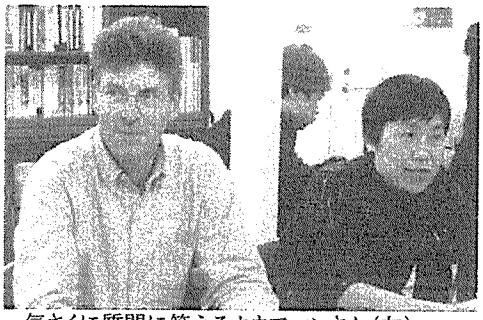
Q. なぜホワイトなんですか？

A. 西洋文化では白は平和の色ですから、女性に対する戦争を止めるという平和の意味。また東洋、アジアの文化では白はお葬式など悼む、悲しみの色ということで、男性によって殺された女性たちを悼もうという気持ちを込めています。

Q. 講演の中で、日本の大学レイプ事件に触れていたがカナダと比べるとどう違うか？

A. もしもカナダであのようなことが起こったら、すごい国民的な怒りが起こっているでしょう。それは、二〇年間女性運動がすごく熱心に問題を取り上げてきて、カナダ社会の態度が変わってきた結果なんです。もちろん今でも問題はあります。ただ、社会的には今では、それは問題なんだということが認識されるようにはなったということなんです。だから皆さんも日本を変えられると思う。男性たちに是非ホワイトリボン・キャンペーンを始めて欲しいなという風に思っています。

（通訳　堀田碧）



気さくに質問に答えるカウフマンさん（左）

＊ホワイトリボン・キャンペーン　//www.whiteribbonn.com

本棚から

『悔やむことも恥じることもなく』

甲野乙子著　解放出版社　2001年

帯には「日本で初めてキャンパス・セクハラを告発したサバイバーの手記」とある。犠牲者ではなく、なぜ被害者をサバイバー（生還者）と名づけるのかの問いに、本書は明確に答えてくれる。

被害期間、恐怖に襲われながらも、誰にも語れず、生き抜き、被害後も、そして裁判で勝訴してあとも、心の傷を抱きながら生き続けていく人―サバイバー。自分の心の声に耳を傾けた、告発の決断から裁判での証言、判決に至るまで当事者である筆者の語りから性暴力のもつ本質が鮮明に伝わってくる。

読後、不思議なことに暗さではなく、生き続けるだけでいいのだよ、というやさしさに包まれる。

＊ジェンダーフリースペースでも扱っています。

来年度のイベントについて

詳細はチラシ・ポスターをご覧下さい。

・資料展示『モノに見る女／男』

本年度同様、来年度も四月頃に図書館梅根記念室での展示を企画中です。日常の「これはジェンダーでは？」と思うモノや写真など、皆さんからの展示品を受け付けています。（希望者には終了後、返還いたします）また、展示作業に興味のある方は是非お手伝いを募集中です。

・ジェンダーフリーシネマパレード２００４

６月頃に上映予定です。学生の皆さんの見てみたい映画タイトルやお勧めの理由など、ジェンダーフリースペースの掲示板にリクエストボックスを設けます。ご意見お待ちしています。

＊この他にもメディア＆トークや講演会など計画中です。大学内掲示や配布物、ホームページをチェックして、是非ご参加ください。